＊＊＊ 「土木の日」に寄せて

毎年 11 月 18 日は土木の日である。その由来は、何のことはない、和数字の「十」と「一」、「十」と「八」を組み合わせると「土木」の字になる、ただそれだけのことである。そんな認識であるから、今年のその日も特別に何かをする、何かに参加する予定もなく、庭木の冬囲いでもして終日（ひもすがら）過ごすつもりであった。

そんな何気ない日曜日の朝、いつものように新聞を広げ、日経「私の履歴書」に目を移すと、「阪神淡路大震災」のタイトルが目に飛び込んできた。今月は興福寺貫首・多川俊映師の筆になる。震災直後、神戸を訪れた師は、眼前に広がる地獄図を目の当たりにしながらも「惨状の中にも少しもダメージを受けていないエリアもあり、そこにはごく普通の日常の光景があった。・・・大地には目に見えない筋というのがあるんだな。それが人の幸不幸を隔てるんだ。」と感慨を記している。

この「筋」とはなんだろう。大地のことであるから、地形・地質やその生い立ち、さらにはプレートの活動や活断層の所在などが関係することには思い当たる。さらに、その上で営まれる人々の住まい方・暮らし方も影響するだろうし、あるいは人知の及ばないところまでのことであるかもしれない。今年9月6日に発生した「北海道胆振東部地震」の被災状況にも、これら立地条件の違いにより大きな地域差が生じている事実が認められる一方で、隣同士でも人命にかかわるほどの差が生じている現実にも直面した。

その上で、「大地は人の善悪や都合などいささかも忖度しない。ただその摂理というか、運行の赴くままに揺れる時は揺れる。それが自然というもので、その自然の中で（人間は）生活させてもらっている。」のだと説いている。「自然の中の人間」であって、「自然と人間」ましてや「人間と自然」などと併記することにはならないと、人間の奢りに警鐘を鳴らしている。

この自然観こそが、我が国の長い歴史の中で培われ、幾多の困難を乗り越えてきた日本人の原点であり、今も脈々と引き継がれてきていると、時に応じて感じている。

ひるがえって、我が国は、モンスーン地帯に属し、ユーラシア大陸の東端に位置する島国で、しかも火山国であるから、四季が明瞭で、風光明媚な景色と豊かな温泉に恵まれ、安全で美味しい食材には事欠かない。半面、頻発する自然災害により多くの犠牲を強いられてきた歴史があり、激甚化する災害を見るまでもなく、一定規模以上の外力に対しては今も状況に変わりはないのが現実である。否、都市への集中により被害はより甚大なものになっている。

このため、国は「防災・減災」、「国土強靭化」を主要施策に掲げて、生活に欠かせないインフラの総点検と災害時にライフラインが維持されるよう強靭なインフラの創出を目指しており、防災・減災、国土強靭化のための対策を年内に取りまとめ、三年間で集中実施するとしている。この実現には地域の特性を踏まえた実行力が求められるから、同じく主要施策である「地方創生」がその基礎づくりに欠かせないことは言うまでもない。地域力づくりもまた防災・減災へとつながっているのである。

そして、大地と対話しながら仕事をしている土木関係者こそが「防災・減災」、「国土強靭化」の主役を担わなければならない。今こそ産学官が、その境界を乗り越え、経験や知恵を結集し、おおいに力を発揮するときであろう。

「土木の日」を迎えて、課題解決のために何ができるか、微力を傾けたいと心を新たにしている。

20181118　MS生

蛇足ながら、昨年来国会を騒がせてきた“忖度”は、マスコミの悪乗りにも操られ、早い時期から年末恒例の今年の流行語大賞の有力な候補とされてきた。

しかし、人間の愚行など嘲うかのように、自然は人間の都合などいささかも“忖度”することなく、今年も西日本や北海道を中心に多くの自然災害が犠牲をもたらしている。一方、日本人のバランス感覚の為せる業か、本質に迫れない、あるいは政治の本質ではない“忖度”問題は夏以降すっかり影を潜めてしまったようである。そして、“忖度”は大賞の候補にすら上らなかった。

今年の大賞は、平昌五輪銀メダルに輝いたカーリング女子チームの、北海道弁丸出しの「そだねー」に決まったとか・・・。

20181204　追記

試験湛水中の夕張シューパロダム（2014 年 11 月 13 日）